

「美術と戦争」一寄贈品展の戦争画集を中心に一

ピースあいち研究会 丸 山 豊

毎年この時期に開催される寄贈品展も今年で 8 回目を迎えます。「宝の史料が一杯」の中から美術面を中心に私なりの勝手な感想を綴ってみます。

1. 【聖戦美術】と【大東亜戦争陸軍作戦記録画】－2つの戦争画集



「聖戦美術」のタイトル題字の脇に「石根」（いわね）と読める署名があります。もちろん松井石根です。石根は名古屋市中村区出身、上海派遣、中支那方面軍司令官として南京入城の主役でした。彼の達筆な題字で「聖戦」と「美術」を一体化しました。重厚な表紙タイトルに意味があります。

国家総動員法で美術界も日本美術報国会と改組され戦争への協力を強いられます。これらの画集は、陸軍の指示で戦争画制作に携わった従軍（派遣）画家たちの作品集です。ここには、一流の芸術家の作品ばかりが収録されています。一枚一枚から戦場を芸術として描かねばならない葛藤も読み取ることができます。

2. 五人の著名画家の壁面展示から読み取りたいこと

○中村研一：《コタ・バル》

日英米開戦は 1941 年 12 月 8 日早朝、海軍による真珠湾奇襲から始まったとされていますが、実は陸軍の英領マレー半島コタバル上陸が先です。この作品は中村の最高傑作と言われます。鉄条網をかいくぐる日本兵の勇猛さを描きました。ここを出発点としてシンガポール、スマトラ、ジャワ、フィリピンへの東南アジア侵略がつづきます。



○藤田嗣治（つぐはる）：《シンガポール最後の日（ブキ・テマ）》



「右の腕はお国に捧げたつもり」と描いた藤田の戦争画は日本人を奮い立たせました。ブキ・テマ高地のすぐ先はシンガポールです。藤田の署名入り解説もあります。彼の気魄が伝わります。

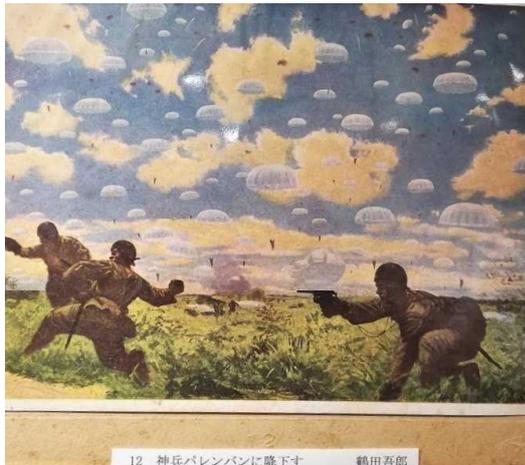
《アッツ島玉砕》《サイパン島同胞臣節を全うす》（ここにはありませんが）の 2 点は「気魄迫る芸術的名画」とされ崇拜の対象とまでなり、その絶望的な死の描写を見た人々に本土決戦の覚悟を呼び起こしたといわれました。しかし戦後藤田は日本を離れフランスで制作活動をつづけ、高い評価を受け最期を迎えました。

○宮本三郎：

《山下・パーシバル両司令官會見図》

シンガポールで陸軍司令官山下泰文(ともゆき)が英軍司令官パーシバルに「イエスかノーか」と降伏を迫る歴史の教科書でも見られる有名な作品です。

宮本三郎は藤田嗣治と並んで誰よりも優れた戦争画を描いた一人です。また彼は「戦争画は楽しくて仕方ない」とつぶやいていたそうです。



○鶴田吾郎：《神兵パレンバンに降下す》

絵の題で国民は荘厳さを感じます。スマトラの石油資源の先兵となる絵です。南の空に舞うたくさんのパラシュートを天から下る「空の神兵」とあがめています。

この一枚の絵の中に地上の戦い、着地瞬間、空中落下傘の三場面の侵略が凝縮されています。「なぜ落下傘なのか」貴重なスマトラ油田地帯を保全するためです。

○小磯良平：《カリジャティの會見図》

蘭印カリジャティでのオランダ軍降伏會見図です。オランダ降伏により蘭印在住の多くのオランダ民間人も日本に送還され各地の強制収容所で苦しい体験を余儀なくされました。



小磯は、有名な《斉唱》など少女や女性を清楚に描く画が多く、戦争とは無関係なものでした。戦後「戦意高揚のために戦争画を書いてしまったことが心が痛む」と書いています。

戦争画を反省し、戦後は気品溢れる女性を描いた作品を多く手がけました。八千草薫の肖像画も残しています。

3. 芸術と戦争責任

軍部は「芸術は理屈抜きに人の感情に訴えて、見る者の心を動かす」「音楽は軍需品」とばかり芸術に力を注ぎました。「誰のために、何を、なぜ表現するのか」といった内面

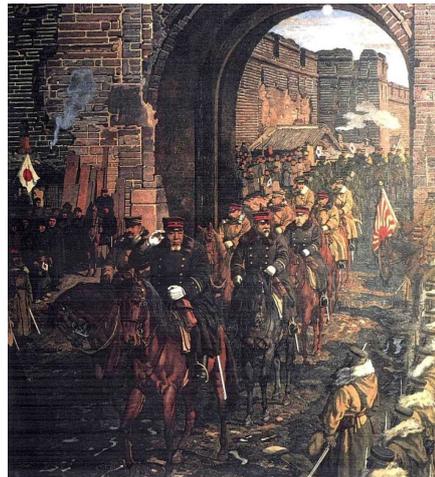
も感じとる必要があります。もちろん絵の感じ方は見る人の自由ですが、歴史資料としては「画家の描いた意図」「歴史的背景と役割」から冷静に歴史的に分析することが求められます。

音楽や美術は確実に国民の心を支配し歴史を動かすことは、朝ドラ「エール」で登場した音楽家の山田耕筰も古関裕而も同じです。特に近年、藤田嗣治の絵に「戦争画ではあるが反戦、厭戦を感じた」との評価を耳にします。以前、藤田嗣治展で絶望的な死闘作品（前述の2点）の実物を見たことがあります。「忠魂」「殉教」「英霊」として「当時の人々に敵への怒りを駆り立て、賽銭を投げ入れ手を合わせた人がいた」ことを思い出しました。

4. 満州事変をどう伝えたか

《日露戦争画 奉天入城》

馬上は大山巖です。発行が1935年3月10日。この日は陸軍記念日です。この絵で国民は日露戦争奉天激戦を想起し「満州は日本の生命線」のスローガンに共鳴しました。（*奉天=現中国東北部の瀋陽市）



《満州事変絵巻》



スケッチ風で簡潔、ユニークな資料です。プロの芸術家ではなく絵のうまい軍人が残した絵巻です。「蒙古襲来絵詞」「米騒動絵巻」を彷彿させる伝統的描き方です。ストーリー性を大事にしている点より分かり易かったかもしれません。



《満州事変大畫譜》

満州の「花澤中隊の尖山南方地区地上攻撃（写真）」の絵から、関東軍の錦州爆撃（1931.10.8）がイメージできます。いずれも「満州事変」は日本人にとって遠い存在のため、戦意高揚ではなく勸善懲悪として描かれています。



美術に絞って書きましたが、1931年9月18日から始まる満州・中国・東南アジアへの侵略（15年戦争、アジア太平洋戦争）の経路が絵画から読み解ける展示です。

(2021.1.19)